

第 2 回世田谷区総合教育会議

日：平成30年10月27日（土）

場所：砧区民会館集会室C・D

午後4時5分開会

○司会 それでは、ここからは総合教育会議ということで、意見交換ということになります。

では、区長、よろしくお願いたします。

○保坂区長 ちょっと相当無理な詰め込みスケジュールで、これから30分で総合教育会議というのをやり終えて、今日は終わりということになってございます。

大変熱心な濹澤教育委員の問題提起から、山藤先生の講演、また、ミニ授業、そしてワークショップと続いてきました。

次のページをおめくりください。特にこの総合教育会議では、昨年、平成29年というところをちょっと見ていただきたいのですが、幼児期からの豊かな「遊びと学び」の環境づくり、「学びの質的転換」と「新教育センターの役割」、「配慮を要する子どもたち」と「学びの多様性」、「子どもの可能性を伸ばす学校外の教育環境」、これはいろんな角度から論じたということです。結局、今大きな転換期に私たちは直面していて、いわゆる勉強するか学ぶ、学習するというこの本質的な転換が迫られているのではないだろうかというときに、何がどのように行き詰まっていたり壁に当たっていたりするのか、また、どのような転換が必要なのかということ、例えば遊びという場面から見てみたとか、あるいは障害を持つ子どもたちをどういうふうに多様な学びの中で伸ばしていくことができるのかなどを議論してきて、冒頭も言いましたけれども、7月はかなり大勢の方がお集まりになったのですが、まさに学びの質的転換ということテーマに文科省からもお話をいただき、先ほどもちょっと言いましたけれども、これからは「主体的・対話的で深い学び」だと学習指導要領の中に書き込んである。これは今までやってきたような正解が1つかっちりあって、そこに到達していくという形の学びとは少し違い、多様なアプローチがあって最適の解に近づいていくプロセスそのものを評価していくみたいな、そういう話でした。

きょうのお話に移りますけれども、山藤さんの話を聞いていて、私が実は一番印象に残っている授業というのは、たしか小学校5年生のときの図工の授業で、そのときはその先生が1時間独演したんですね、しゃべり続けたんです。今考えれば相当むちゃくちゃな話ですけども、岩には顔があると言うんですね。岩は違うんだ、1つ1つ顔がと。これは描くのが難しくてねとかという話を、5分、10分じゃないですよ、ずうっとしていて、子どもたちは飽きてきて聞かないと粘土をちぎって投げるとい、今ならちょっと問題になるような授業だったんですが、それがなぜ印象的だったかという、悩んでいる大人、自

分はこれがわからないということ子どもたちにぶつけてくるってすごく新鮮でした。それで、私は授業が終わってからその先生の部屋にただ1人行って、先生のなかなか描けない岩の絵を見せてくださいと言ったら大変喜んで、30分、1時間ぐらいかな、その岩の話をしてくれたという思い出がございます。

そこなのですが、結局、山藤先生の授業の中で、結構皆さんも印象深かったと思いますが、イエナプランというオランダの教育方法の話もされました。プレゼンテーションといって、いわゆる学んだことを地域の大人たちをギャラリーにしてしっかり伝えと。それを地域の大人たちと一緒に学んでいる子どもたちも受けとめるという、そういう最大に重要視している場面があるそうなのです。私はオランダでそのプレゼンテーションをまさに用意している12歳の女の子にちょっと聞いてみましたが、それはネルソン・マンデラの生涯というのをプレゼンしようとしていました。亡くなったばかりのころだったので。

先ほどの授業の授業風景ですか、学習風景の中で、東京書籍株式会社に高校生たちが行くという場面があるじゃないですか。その子どもたちが生物を学んで、次の弟、妹世代の子どもたちに、こんな教科書のような、よりいいよということを提案に行ったということだと思いませんか。それが採用されそうだというようなお話ですが、そこがちょっと鍵のような気がします。

つまりは、社会が複雑化するにつれて、原初、昔は、多分数学にしても図面をどうこうするにしても、みんな実学だったはずですよ。家を建てるためにこういう寸法をはかるとか設計をするとか、そこに始まって、全部実学だったのが、社会が複雑化するにつれて、またある種の入学試験制度みたいなものが整備されるにつれて高度に抽象化されていき、その抽象化された、例えば教科のいろんな学びがテストで評価されて点がとれるかどうかというのはリアルな成果であって、その通過儀礼が過ぎると何かフェードアウトしていくような学びがこれまでだったのに対して、やはりそういう抽象的な枠から学びを開放して実学に近づけるといふか、社会の現実にもう1回自分たちが入って行って、その中で起きていることをまた引き受けてくるという、そういう手法だと思います。

ですから、いろんな声の中で、今、学校現場はただでさえ忙しいのに、またSDGsという1つの課題が出て、そこにまた時間を割かなければいけないという考え方は多分違うんじゃないかなと私は直感的に思います。つまりはSDGsの17の、あるいは26のいろいろな項目を暗記して、そのすばらしい活用事例なんかも本が出ていますから、それを頭に入れて、それが新しい試験には出るぞみたいな、そういう話では多分ないのではないかと

いうふうに思っております。

というところで、自分の言いたいことも少しは言いましたので、教育委員の方々に順番に、きょうの一連のお話の感想と、せっかくですからアクティブトークにしたいので、提案、アイデアなどありましたらお願いしたいと思います。

では、宮田教育委員から。

○宮田委員 宮田です。よろしく願いいたします。

本日、お話を伺いまして、将来を担う子どもたちが、今世界がどのような問題に直面しているかを知り、また、身近なことから目標に向かって、自らどのようなことができるかを考えながら実際に行動できるように、大人が教育の環境を与えることもとても大事なことであったと思います。そのためにも、まずは大人がそういった意識づけを持って取り組むことが必要だということも感じました。

先程のグループワークでもお話しが出ていましたが、区内公立小中学校では、以前からエコ活動やリサイクル運動がありまして、環境を大切にする活動というのは各学校で取り組まれています。ペットボトルやボトルキャップや古紙の回収、そういった環境に配慮した活動や子どものワクチン支援に結び付く活動も行っています。中学校では制服、体操着のリサイクルということで、これは保護者も子どもたちも実際に自分で持ってきて、それが活用されているということを知っています。こういった活動は保護者も参加しておりますが、学校だけではなく、地域、それから国とか世界とか、その先の未来まで、今はそういったことも考える時代だということを感じておりました。

また、子どもたちが未来に向かって考え、問題解決に向けて実際に体験するということがとても大切なことと考えます。小学校の授業を拝見させていただいて、2年生ぐらいでプレゼンや、児童でグループディスカッションをして、自分の考えを発表する場というのも見えています。本日のお話にもあったように、他の中学校でも機会が与えられれば、地球規模で環境問題を生徒が自分たちで考え、グループで発表するということが、そして、実際に企業の大人の前で子どもたちがプレゼンをしたという話も伺っております。

学校で今できることということで、小学生でしたら例えばペットボトルの活用。以前、小学校で行っていたのは、傘がずれないように、傘立ての下の方に半分に切ったペットボトルを敷き詰めて傘がずれないように工夫をしていました。それは大人が考えたことですので、例えば子どもに他にどういった使い道があるのかとか、また、子どもが普段発する言葉の中から、先生などの大人が言葉を拾ってそれを広げていく。最初は、そういった中か

らいろいろな活動に結びつくようなヒントがあるのではないかと思います。

○保坂区長 ありがとうございます。多分このSDGsの取り組みというの、今、いきなりゼロから始まっているわけではなくて、地球環境問題から、あるいは総合的学習が学校に導入されたときから、多分学びの改革ということについてはすごく問題意識を持って取り組まれてきたことと思いますが、多分違いはだんだん間に合わなくなるかもしれない。ことしの豪雨とか、8月は5日連続で台風が発生しました。こういう状態を見ると火急、もう本当に時間との闘いになってきたな、そのあたりがちょっと違ってきているかと思います。

では、井上教育委員、続いてお願いいたします。

○井上委員 最初に感想ですけれども、平成32年度から実施される新しい学習指導要領に「社会に開かれた教育課程」という考え方がありまして、それはどういうものかという、社会や世界の状況を幅広く視野に入れてより良い社会をつくっていくということを、学校が世の中の人たちと広く共有していくこと、特に教育課程を介して、そうした目標を実現していく、ということです。これまでも、学校と社会という観点では、地域の人や保護者の方に加わっていただいて学校教育を豊かにしていこうということはあったのですが、それ以上に、現実の社会を意識して、先ほど区長からも話がありましたが、「現実の文脈」と言いますか、オランダのイエナプランなどでは「オーセンティックな」という言い方をしていますが、そうした本物らしさを意識しながら、子どもたちがみずからの人生を切り開いていく、そういう意欲や能力をつけていくことが重要だと認識されるようになってきた、と理解しています。

今日は、澁澤さんや山藤さんからSDGsについて、いろんなことを教えていただきました。SDGsの17の視点は、私たちが社会や世界に向き合って、多様であり、有限であり、お互いに密接に関係していて、1人1人が責任を感じながら生きていかななくてはならないこと、そのことを「自分の問題」として考えて行くべきことを教えてくれます。まさに、教員や子どもたちが「社会に開かれた教育課程」を通じて、社会とともに考えていく、とてもよいお手本だと思いました。

子どもたちは、環境や貧困の問題については非常にピュアですから、上手にスイッチを入れてあげれば、主体的で深い学びにつながっていくと思います。私は、大学で教員養成に関わっているのですが、山藤先生のお話をうかがいながら、若い世代には山藤先生のようなセンスを持った方が増えてきているように感じました。そうした意味でも、子どもた

ち以上に、どうすれば、先生方のスイッチを入れられるかを考えていかねばならないのではないか。それができてはじめて、難しい問題に取り組むマインドセット、新しい感覚で行動を起こしていくことができるのではないのでしょうか。

最後に、提言というほどではありませんが、私の理解では、SDGsは多様な視点を生かして、ボトムアップ的につくり上げられてきた目標であって、決して政府とか国際機関とかの誰かが上から定めて「やらなければいけません」ということではないと思っています。経済や社会あるいは自然環境に関して、互いに関係し、相互に依存するような複雑な問題を調和的に解決するにはどうしたらいいのか。そして、そのベースには何より、先ほども強調されていた「誰1人置き去りにしない」という理念があるわけですから、その理念を大事にしながら取り組んでいかななくてはいけない問題です。そうだとすれば、山藤先生というすばらしい先生がいて、「山藤先生しかできない授業」ということではいけないだろうと思います。

その意味で、大した提案にはなりませんけれども、それぞれの学校で「社会に開かれた教育課程」という観点から、カリキュラムをうまくマネジメントして、教科横断的な、学年を超えたようなテーマに取り組んでいくことから行動を起こしていくのが現実的ではないのでしょうか。例えば、キャリア教育の切り口でもいいでしょうし、家庭科でも、数学でもできることがあると思います。その際に、先生方には「誰1人置き去りにしない」という理念を忘れないでいただきたい。

その一方で、子どもたちに教科書の内容を習得させなくてはなりませんし、「受験」という現実の問題もありますので、そうしたことも両立させながら、まさにそれがさまざまな問題が相互に密接に関連していて、「誰1人置き去りにしない」というSDGsの視点ともつながっていくと思うのですけれども、そうしたかたちで1つずつ、やっていくということが必要ではないかなと思っています。

○保坂区長　ちょっと御紹介がおくれましたけれども、宮田教育委員はPTA活動をずっとやってきた立場から、また、井上委員のほうは、今御自分でおっしゃいましたけれども教育学、いわゆる教員の、学校の先生の先生ということで、先生づくりをされているということでございます。

では次に、長年、世田谷の学校で、最後には校長先生をずっとされていた松平先生のほうに一言お願いします。

○松平委員　2つお話ししたいと思います。一つ目は、きょうの話を聞いて、自由な発想

ができる子どもたちの育成がこのSDGs達成の鍵になる、そんな気がしました。だからこそ指導する先生方には、これは無理だ、だめだ、ではなくて、ちょっとおもしろそうだからやってみようとか、子どもたちの背中を押してあげるような指導が必要だと思います。

ところが、実際には子どもたちが計画する段階で、先生方はご自身のこれまでの経験で、こうすると失敗する、こうすればつまずかずにうまくいくというのがわかっているのです、ついそれを事前に子どもたちに言ってしまい、子どもたちの自由な発想を奪っていることが往々にしてあります。確かに、大人のルールや制限の中でやれば安全で失敗もしないのかもしれませんが、けれども、それではイノベーションは生まれません。本当に無理かどうかはやってみなくてはわからないのです。新しい発想で世の中を動かしていこうとすることが大切なのであって、伸び伸びと発想できる環境を整えて指導するのが教師の役割だと思います。そのためには、Plan・Do・Check・ActionというPDCAサイクルにこだわることなく、計画(Plan)より実行(Do)から始めてみることも必要です。まずは、やらんと。そこから考える力を刺激する。それこそSDGsの4番目にある「質の高い教育」の実現につながるのだと思います。

二つ目は、SDGsが抱える「誰一人置き去りにしない」社会の実現のために、学校は何ができるのか、ということです。これまでも個に応じた指導や習熟別指導などは行われてきました。私が教員になった昭和50年代半ばというのは、まさに荒れた学校という校内暴力のピークでした。そして、生徒が荒れてしまったのは、勉強がわからないことが大きな原因でした。小数、分数の四則計算も満足にできない生徒たちが、比と割合や関数などわかるはずがありません。5時間、6時間じっと椅子に座っているのは苦痛以外の何ものでもなかったに違いありません。でも、実は彼らはわかるようになりたいと思っていたのです。だから、先生方は何とかしようと、休み時間等の補習授業を頑張って行い、校内暴力の解消に尽力したのです。そのツッパリ生徒たちも、幼稚園や保育園での保育体験では、強面の顔がにっこり柔和になります。なぜかというと、「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と笑顔で園児が寄って来るからです。つまり、普段は邪魔者扱いされている自分たちでも誰かの役に立てるのだ、という気持ちをもてたからだと思います。だから、そのような自己有用感を学校現場でできるだけ多く持たせるような教育を推進していけば、彼らも意欲的に取り組むようになるはずです。

以上、簡単ですけれども、教員の立場からお話をさせていただきました。

○保坂区長 ありがとうございます。

ある意味、このSDGsを今回やろうという大きな役割を果たされたのは澁澤教育委員でございまして、今お話しがあった自己肯定感が非常に薄くなってきていると。子どもだけではなく、学校現場の先生の中にもそのことが意外とあるんじゃないかということも言われていますし、また、友達が何かできていなければ、何か困っている人がいれば助けるという、昔から日本の共同体の中にあつた相互扶助、おかげさま、お互いさま、そういったものが経済成長最優先の中で非常に軽視をされてきてしまった話。また、命がどこでつながってどう循環しているのかという、昔の人が持っていた、また先住民族の中にも今もなお引き継がれている自然観、哲学といいますか、自然への畏敬の念みたいなものも含めて、何でも思いどおりになるのが当たり前みたいな、そういう誤った時期を経てしまったなどのお話を多々今までしていただいているんですが、これまでの話を踏まえて、澁澤教育委員をお願いします。

○澁澤委員 きょうは多分、皆さん久しぶりに青臭い議論をされたと思うのですよ。これをする時期に来ているということです。要するに、今までの私たちがつくってきた時代がもう持続可能じゃないということのはっきりわかって、それを認めた上で、もう1回青臭い議論をしよう。

例えばこの間のパリ協定があります。その前に京都議定書が決まりました。世界中からいろんな人たち、環境に関心のある、あるいはNGOたち、政府の人たち、みんな集まって決めたのですけれども、あそこに来ている南の人たちはどういう人たちかというと、南の特権階級の人たちが来ているのです。要するにごく限られた人たちが民主主義というルールのもとで、これからの環境問題を議論し、50年先をどう導こうかと議論している。ところが、環境問題の一番の最大の受益者でもあるし被害者でもあるのは、今の子どもたちであったり、あるいは発展途上国の女性であったり、老人であったり、本当は社会の弱者と言われている人たちが環境の一番の被害者になってくる。その人たちはあの議論の中に入っていないのですよ。その意味では、学校現場ももう1回青臭い議論、それはもう生徒も先生たちも対等の立場でどうやってこれを議論するかというその場が1つのSDGsの授業なのかなと思っています。

ただ、私も学校現場をずっと見させていただいて、では、それを今の総合学習の時間だけでできるのかということになると、まさにこれはカリキュラムマネジメントをしなければいけない。きょうの山藤先生の授業が、理科の授業なのか、生物の授業なのか、数学の授業なのか、社会の授業なのか、例えばそういうものを今の授業はその全部を一緒にやり

ましたという形で、要するにカリキュラムとして構成をしていかないと、絶対今あるところには入っていきませんよね。

例えば、安田さんがきのう解放されました。では、シリアの問題は単なる歴史の問題なのか、社会の問題なのか。だけれども、その中には宗教の問題もあるし、物すごく多様な問題で考えないと、あの問題というのは見えてこないはずだ。つまり、そういう多様な青臭い議論を学校現場でできるような時間をどうカリキュラムマネジメントでつくっていくかということ、そろそろ本気で考える時期なのかなというふうに私は思っていました。

○保坂区長 ありがとうございます。

きょうは、現場の先生方もたくさん参加されているので、では、今おっしゃった、まさにこういった大切さは理解できるが、普通、日常に戻ればやるのが山のようにあつてということで、カリキュラムマネジメントということ、多分教育長も直面しているかと思えます。教育主事もきょうも来ておりますので、今の学校の日常の責任を引き受けつつ、でも、これだけもう時間がないぞという中で地球的課題が出てきたということに対して、さあ、教育委員会はどうしますか。

○堀教育長 何でしたっけ、どこかの先生じゃないですけども、今でしょうみたいな答えなんでしょうけれども、本当にきょうは新しい取り組みをさせていただいたと思っております。教育推進会議と総合教育会議のマッチングというんでしょうか、融合のような縦でやるのではなく、我々教育にすると現場の教員、そして地域の方々、教育に関係する方々と本当にアクティブラーニングできたかなと思っております。

山藤先生のお話を聞いて、改めて思ったのは、これは私たちというか、教員の皆さんたちが学校現場で日々やっていることだなと思えました。それをどれだけ深掘りするか、カリキュラムマネジメント的な考え方を持って、子どもたちに考えさせていくのか、こういうことに尽きるのかなと思っております。

先ほど、最初のときに、「サワコの朝」の磯田道史先生の話をしていただきました。本当にあの歴史学者がおっしゃっていますけれども、10年で今まで変わっていたのが、この二、三年で社会が変わっていくということをおっしゃっています。皆さん方もお感じになっているでしょうけれども、今、子どもたちがどれだけ変容してきているか、日々の授業の中、学校運営の中で感じていると思います。保護者の方々も変わってきました。地域の方々も変わってきています。今までのやり方とはやっぱり1つここは変えていかなくては

いけないんじゃないかというふうに少しずつ少しずつお感じになっているのではないかなと思っております。

そういう意味で、区長の質問に答えるわけではないんですが、きょうは小中、あと幼稚園の代表の方々もいらっしゃいますが、各校長会の会長の先生方もいらっしゃいます。その方々に本日、山藤先生からいただいたSDGsの取り組みを来年度、学校の中でどうかしていくのかというのをちょっと一緒に考えていこうかなと思っております。

先ほどずっと歩いてお話とか、あと発表を聞かせていただきました。その中にありましたが、忙しい、これ以上またやらせるのかというようなことがありましたが、それはやっぱり違うんじゃないですかと。忙しいのはわかります。でも、私たちは子どもたちを教育する立場です。いろんなことを勉強し、学び、チャレンジしていかなくてははいけません。先ほどの山藤先生のお話の中にもありましたし、澁澤さんの話にもありましたけれども、目の前の課題、現状にとらわれてはいけないと改めて思います。まして社会は変わっているんです。人工知能、AIに私たちの人間の社会が取ってかわられるであろうというシンギュラリティの社会が来るであろうと言われておりますが、そんなことを実現させないためには、皆さん方の日々の学校の対応というんでしょうか、子どもたちとの向き合い方が大切なんだと改めて私は思っておりますので、ぜひ小中校長会、それと幼稚園の先生方と相談させていただきまして、きょうの取り組みをきょうで終わらせることのないようにしていきたいなと思っております。

最後に1つお願いというんでしょうか、きょうのお話の結果を1人1人の皆さんがどうお感じになっているかわかりませんが、教育は社会を変えられる、これは山藤先生もおっしゃっていました。13年で世界を変えられるとおっしゃっていましたが、教育は社会を変えられると思っております。これは私が言った言葉ではなく、高橋一也さんというグローバル・ティーチャー賞をおとりになった方が2016年におっしゃっています。それは皆さん方の1人1人の力だと思いますし、もう1つ、人工知能、AI、情報化の社会の進展に負けないためにも、子どもたちの感性を豊かにしていきましょう。それは文化、伝統、歴史、そういうものを幅広く学ばせながら、子どもたちの感性を研ぎ澄ませていってほしいなと思っております。

○保坂区長 短い時間ながら、それぞれの立場で少しアクティブに提案、アイデアも含めてお話しいただいたものと思います。

私はきのう、実は今ぐらいの時間、千歳小学校ですか、そちらのほうに行きまして、東

日本吹奏楽の大会で3年連続で金賞をとったということで、そういう吹奏楽団の48人の小学校4年生、5年生、6年生ですか、演奏を聞かせてもらいました。なるほどこれは金賞になるなど。つまり、私が吹奏楽というとぱっと浮かべること、定番のといえますか、スタンダードなといえますか、型を踏んだといえますか、そういうものではなくて、なかなか叙情的で非常にやわらかい、むしろアニメーションが出てくるような、映像を惹起するような、非常に1人1人が自由に演奏しているなという感じがあって、その指導もすばらしいなと思って聞いておりました。聞いたら、どんな曲をやりたいかということ子どもたち同士で話し合っていて、子どもたち同士で練習しているという、そういう気風があるそうなんです。

この話と今のSDGsの話がちょっと結びつくかなと思うのは、多分世田谷区、2700人の教職員の方がいらっしゃるということですね。多分、恐らくSDGsをもう既にやっている事例もあるんでしょうね。ですから、SDGsをやっている学校や授業の取り組みなどを、せっかくここで山藤先生に来ていただいたので、また来年はそういったものも、世田谷区内のいろんな取り組みなども、こういった教育推進会議で、全部はできないかもしれないけれども、一部でこういう取り組みをしていますみたいなことが、区民がたくさん見守る中で発表していただくみたいな、そういうことができると、大分学校のプログラム、そして先生方の実践みたいなものが、こういった議論とだんだん結んでくるのかなと思いますので、青臭い議論を、またいい意味で集中して参加していただいた皆さんに感謝申し上げます、総合教育会議「SDGs（持続可能な開発目標）」の特集をわずか35分で終わりたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

○司会 以上をもちまして世田谷教育推進会議、世田谷区総合教育会議を終了とさせていただきます。

皆様には長時間にわたり御参加いただきましてまことにありがとうございました。お帰りの際には、アンケート用紙に御記入の上、受付の回収箱にお入れくださいますようお願いいたします。また、後ろのほうに模造紙を張ってありますので、お時間がありましたら、ちょっとごらんになっていただければと思います。お忘れ物などございませんように、お手回り品に御注意の上、お帰りください。

本日は、まことにありがとうございました。（拍手）

午後4時39分閉会